



Title	ポストコロニアル・フォーメーションズ：序章に代えて
Author(s)	木村，茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2006，2005，p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポストコロニアル・フォーメーションズ

——序章に代えて——

木村 茂雄

1. はじめに

2000年から2006年のあいだに、ポストコロニアル研究ないしポストコロニアル文学研究の「コンパニオン」や「リーダー」と銘打った大部の本が3冊出版された。そのタイトルからは、大学の教科書や参考書、あるいは一般読者や研究者向けの案内書の役割を自認した本と一応はみなすことができるだろう。近年、この領域の概説書はほかにもいくつか出版されているが、本稿ではとりあえずこれらの3冊を最近のポストコロニアル研究の代表例として取り上げ、そこにみられる新しい展開についていくつか予備的な考察をめぐらしていきたいと思う。まずは、この3冊を簡単に紹介しておこう。

1冊目は、ブラックウェルから2000年に出た『ポストコロニアル研究コンパニオン』(*Companion to Postcolonial Studies*)である(以下、Blackwellと略す)。この本には、二人の編者 Henry Schwarz と Sangeeta Ray それぞれによる序文と結びのほかに、29編の論考が収められている。そのほとんどがオリジナル論文である。また貴重な「付録」として、ガヤトリ・スピヴァックによる本書の書評『「ポストコロニアル研究コンパニオン」を読んで』が巻頭に収められている。

2冊目は、2004年にケンブリッジ大学から出版されたニール・ラザラス (Neil Lazarus) 編の『ポストコロニアル文学研究ケンブリッジ・コンパニオン』(*The Cambridge Companion to Postcolonial Literary Studie*)である。(以下、Cambridgeと略す)。13編のオリジナル論文が収録されている。タイトルには「文学研究」とあるが、後で紹介するように、収録された論文の多くは、歴史的あるいは社会・政治的な関心を前面に押し出している。

3冊目は今年(2006年)になって出たものだが、1995年にラウトリッジから出版された『ポストコロニアル研究リーダー』(*The Post-Colonial Studies Reader*)の改訂第2版である(以下、Routledgeと略す)。編者は *The Empire Writes Back* の共著者の、ビル・アッシュクロフト (Bill Ashcroft)、ガレス・グリフィス (Gareth Griffiths)、ヘレン・ティフィン (Helen Tiffin) の3人。本書は論文集というより、過去50年ほどの間に表されたさまざまな種類のポストコロニアル言説の「さわり」を抜粋して、テーマ別に整理したアンソロジーである。1995年版では86編の文章が14のテーマ群に整理されていたが、今回の改訂版は、121

編の文章を19のテーマ群に配置している。新しく立てられたテーマの下に新しい文章が収められているほか、旧テーマでの文章の入れ替えもあり、121編の半数近く（56編）が今回新しく収録された文章になる。

このアンソロジーについては新収録のものに限っても、以上100編近くの新しい文章に付き合ったことになるが、「ポストコロニアル研究もまだまだ元気」というのが全体の素朴な感想である。ただしこの「元気さ」の印象は「相変わらず元気」というだけでなく、これまでの研究パラダイムの見直しや改訂、さらにいうなら、断絶的ないし分裂的な展開という面による部分も大きい。以下はこれらの見直しや改訂、また分裂や断絶について、いくつかの項目（「ポストコロニアルとはいつのことか、誰のことか?」「ハイブリッド性 / 文化的差異の商品化」「ナショナリズムと普遍主義」「帝国主義とグローバリゼーション」）に沿って話を進めていきたい。ただし、これはあくまで便宜的な整理にすぎず、各項目のあいだのさまざまな関心の重なり合いも生じてくることだろう。最後に、多種多様なポストコロニアル性の形成のされ方と仕方——ポストコロニアル・フォーメーションズ——について総括しつつ、この報告書のほかの5人の執筆者の論考を簡単に紹介し、本稿の序章としての役割を終えたい。

2. ポストコロニアルとはいつのことか、誰のことか?

ポストコロニアル研究の「学問分野」としての確立に、サイードの『オリエンタリズム』（1978）が果たした貢献についてはいうまでもないが、そのおよそ10年後に出版された *The Empire Writes Back*（1989）も、その流行や制度化に拍車をかけた重要な一冊といえるだろう（Cf. Schwarz: Blackwell 14）。ちなみにこの本は、「ポストコロニアル」という語を「植民地化された時点から現在にいたるまで、帝国主義のプロセスに曝されてきた文化の全体を指す言葉」と定義していた。というのも「ヨーロッパ大帝国の侵略にはじまる歴史のプロセスには、そのあいだ一貫して、同じ性質の問題が認められる」からだ。またその対象地域には、アフリカ、インド、カリブなどの被侵略植民地のほかに、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、さらにアメリカなどの移住者植民地が含まれていた（Ashcroft et al. 2）。

その後この定義は、歴史的な面と地政学的な面、その両面からの批判を受けることになる。まず「ポストコロニアル」の時期を、「植民地化された時点から現在にいたるまで」とするのは明らかに名辞矛盾だし、定義として曖昧すぎるという批判がある。またその対象地域を、白人移住者の植民地、とくにアメリカにまで拡張するのは、白人による植民地主義の暴力を不可視化するものだという指摘もなされている。まず后者の点についていうなら、今回の3冊においても、移住者植民地だけでなく、イランや中国など、厳密な意味では植民地化されたことのない国を「ポストコロニアル」の範疇に加えることを問題視する立場もみられた（Robbins: Blackwell 565）。この研究においてはあくまでも被侵略植民地を中心とすべしという主張には、ある意味で共感できなくもないが、しかしこのような限定

的あるいは古典的なモデルで、近代植民地主義の歴史全体のダイナミズムや、現在のグローバリゼーションの問題が十分に捉え切れるかという点については疑問も生じる。いつでもどこでもポストコロニアル、あるいは、いつでもどこでも「同じ」ポストコロニアルという議論はもちろん避けなければならないだろうが、しかし最近の研究を通観するにつれ、アッシュクロフトたちの「ルースな」定義の生産性を逆に証明するような領域の拡大化も着実に進んでいるように感じられる。

アッシュクロフトたち自身の新しいアンソロジーでも、多くのアメリカ先住民研究の導入といった面にその傾向は表れているが、これはある意味では想定内のことだろう。一方、当初のアッシュクロフトたちの想定外にあったと思われるような領域の拡大化もみられる。たとえば、ポストコロニアル研究に先行する時期のエジプトの「ポストコロニアル」作家・作品を、ナセル時代（1952-70）、サダト時代（1970-81）、そしてその後の時代の歴史的状況との関係から論じた研究（Al-Nowaihi: Blackwell 282-303）、1997年の香港返還をめぐる言説を、アヘン戦争時の古典的な植民地主義と現在のグローバル資本主義の両面から分析した論文（Chow: Blackwell 304-318）、ジャワの影絵芝居とジャワ知識人、そしてオランダ植民地主義との三つ巴の関係を跡付けながら、それが植民地独立運動で担った社会文化的な役割を検証した論考（Sears: Blackwell 333-359）などである。さらに、アフリカやインドのポストコロニアル社会の性質を規定している法制度（postcolonial legality）を、比較の視点から追究した論文などもみられる（Baxi: Blackwell 540-555）。

ここで避けられない一つの基本的な問題は、ポストコロニアル研究における対象言語の問題である。*The Empire Writes Back* も、英語圏とそれ以外の旧植民地との関連性は主張していたが、その実際の材料はあくまでも英語中心であり、この本の流行が皮肉にもその傾向を強めてきたといえるだろう。上に挙げた最初の例の著者は、コロンビア大学の「中東・アジア研究」学科のスタッフだが、そこで博士候補者に求められる二つのリサーチ言語に、フランス語やドイツ語などのヨーロッパ言語だけでなく、アラビア語、ヘブライ語、ペルシア語なども含めるシステムが、論文執筆の前年にやっと実現したということだ（Al-Nowaihi: Blackwell 284-5）。また、最近のスピヴァックの比較文学批判（Spivak 2003）においても、研究者の言語の知識という問題はしばしば取り上げられている。『闇の奥』をアラビア語やベンガル語の文学と比較することでスピヴァックが「身をもって」示している一つの点は、非西洋の言語を学ぼうとする私たちの意思や努力ということだろう。また、このような努力が可能にする視野の拡大を抜きにしては、彼女の主張する「惑星的」な視座に立った比較文学を実践することもたしかに難しいかもしれない。それはともかく、もう少し控え目にいうなら、翻訳に頼ってでも、英語圏以外の広範なポストコロニアル文化にもう少し広く触れることは、英語中心のポストコロニアル研究に馴染んできた私たち（少なくとも、私自身）にとってはぜひとも必要なことに思われる。

アッシュクロフトたちの定義における「時期設定」の曖昧さについていうなら、これも「とりあえずそのまま」でいいのではないかと思わせる研究動向もみられる。それは一つ

には、ポストコロニアル研究の「前史」に対する再評価の動き、もう一つには、帝国主義とグローバリゼーションとの連続性を強調する議論である。前者の例としては、ロバート・ヤングの最近の大著（Young 2001）なども挙げられるが、今回の3冊においても、独立以前のポストコロニアル言説、たとえばフランツ・ファノン、クワメ・エンクルマ、アミルカル・カブラルなどの反植民地主義ナショナリズムの思想や活動の再評価がさかんに行われている。後述するように、そのような傾向はケンブリッジの論集にとくに顕著である。また、「反本質主義」を規範とするポストコロニアル研究において悪玉扱いされてきたネグリチュード運動を、脱植民地化に向けた「アイデンティティ形成」の重要な契機として再評価する動きなどもみられる（Ahluwalia: Routledge 231-232）。

植民地支配の歴史にはつねに抵抗やその契機も含まれているとすれば、独立後のポストコロニアルの「新しさ」を強調しすぎるのは、たしかにその歴史的なダイナミズムの全体を捉えにくくしてしまう可能性があるだろう。また、帝国主義とグローバリゼーションとの連続性という一方の問題意識が、このような形式的な歴史区分をさらに困難にしている。というのも、現代のグローバル資本による世界支配が過去の帝国主義の延長にほかならないという見方がもし妥当なら、現在のポストコロニアル状況を直視するのに、独立の前か後かといった区分はあまり決定的な意味をもたなくなるからだ。繰り返すなら、いつでもどこでもポストコロニアル、あるいは、いつでもどこでも「同じ」ポストコロニアルという議論には充分警戒しなければならないが、そのことを意識しつつ、ポストコロニアル概念の形式に囚われない柔軟性を維持していくことは、その生産性を高めていくためにも重要なことだろう。つまり、「ポストコロニアル」がいつのことで誰のことかは一概に規定できないということになってしまう。しかし、植民地主義状況における支配と抵抗のダイナミズムに対する注意深い注目という点をポストコロニアル研究の中心に据えるなら、「ポストコロニアル」はいつの時代にも、どのような場にも見出しうる状況、あるいは発生しうる状況といえるのではないだろうか。

3. ハイブリッド性・文化的差異の商品化

ハイブリッド性という概念は、ホーミ・バーバが1980年代前半に提示した戦略的な概念の一つだが、その中心的な意義は、支配者側が主張する文化の「純粋性」や「真正性」の価値に対し、それまで貶められてきた「雑種性 / ハイブリッド性」の創造性を積極的に主張することにより、被支配者の抵抗の声を、本質主義に陥ることなく救い出そうとした点にあるだろう。このようなハイブリッド性の概念は、その後多くのポストコロニアル批評家に活用されるとともに、いくつかの批判も受けてきた。その一つは、それは文化の「純粋性」の存在という仮定に基づいた概念であって、すべての文化はハイブリッドであるというより本質的な事実を無視した、それ自体二項対立的な議論であるという批判である。しかしこのような批判は、バーバが丹念に練り上げた戦略性を（ときには故意に）捉え損ねた形式的論理のように思われる。一方、ポストコロニアリズムとポストモダニズムとの

共犯関係という視点から、ハイブリッド性や文化的差異の商品化という現象を表面化させた最近の議論は、ポストコロニアル研究の存立基盤にもかかわる重要な問題提起だと思われる。このような関心は今回の3冊においても随所に表されているが、そこで必ずといっていいくらい言及されているのは、1994年のアリフ・ダーリック (Arif Dirlik) の論文 “The Postcolonial Aura: Third World Criticism in the Age of Global Capitalism” である。

ダーリックは、マルチカルチュラリズムの最初の提唱者は多国籍企業であったという。なぜなら文化的な「多様性」は、現在のグローバル市場にとってプラスに働くからだ (Cf. Sharpe: Blackwell 119)。そして、その多くが「第一世界」への移民で占められるポストコロニアル研究者たちのポストコロニアル性とは、「グローバル資本主義の知識人」が置かれた状況にすぎず、これらの知識人たちは、その状況を意図せずとも後押ししているのだという (Cf. Bartolovich: Blackwell 140)。この議論に対する批判ももちろん出されてきた。たとえばスチュアート・ホールは、この論文発表直後の1996年に、その「還元主義」や「機能主義」を批判している (Cf. Alessandrini: Blackwell 448, n.2)。しかし、2000年出版の『帝国』がこれを踏み台にポストコロニアル理論の「差異の政治学」を批判するなど (Hardt and Negri 138-146)、ダーリックの議論は近年その潜在的な「パンチ力」をますます強めている感がある。たとえば Blackwell のゴールドバーグは、現代の「リベラルな」諸制度が「多様性を管理」したり「差異を秩序化」するなどの「能動的」な動きをみせている一方、ポストコロニアル研究においては、それらの性質が「受動的」に捉えられる傾向（「物象化された実体化」）を批判している (Goldberg: Blackwell 81-2)。これらの議論によるなら、ポストコロニアル研究が文化的な「多様性」や「差異性」を唱えれば唱えるほど、それは体制側に有利に働くだけなのだ。これは真剣に受け止めるべき問題提起だが、ただし、これらの議論のほとんどが、文化的「多様性」(diversity) と「差異性」(difference) とを同一視していることには問題があるだろう。

「多様性」と「差異性」との違いはバーバ自身何度か強調していたポイントであり、その文章の一つは Routledge にも収められている。彼はその冒頭で、文化的多様性は「認識の対象」つまり「経験的な知識の対象としての文化」なのに対して、文化的差異は「文化的な発話 (enunciation) のプロセス」であると述べている (Bhabha: Routledge 155)。私なりに言い換えるなら、その決定的な違いは、文化の観察者や実践者の主体の位置の相違にあるように思われる。ダーリックがいうマルチカルチュラリズムや、ゴールドバーグやハートたちがいう「多様性」とは、既定の文化をその外部から全体化し、それを「認識の対象」とする視点を前提としている。したがってそれは、必然的に「管理」と結びつく概念なのだ。バーバはこのような意味でのマルチカルチュラリズムや多様性の政治の支配力を十分に意識しつつ、そこに抗いながら、あるいはその間隙を縫って実践される文化の変容力を、「文化的差異」という言葉で表現しているように思われる。

それはそうとしても、このような意味での「差異性」さえも「多様性」の論理に取り込んでいこうとするグローバル資本のパワーは、やはり無視できるものではない。したがっ

て、ハイブリッド性や文化的差異を無批判に抵抗と同一視し、それをただ称揚するようなポストコロニアル批評はその効果を失いつつあるといわなければならないだろう。ハイブリッド性や文化的差異といった、これまでのポストコロニアル研究における中心概念の商品化や空洞化という事態は、多くの研究者を戸惑わせるにちがいない。しかしダーリックたちの議論も、それ自体グローバル化的な傾向が強すぎるように私には思われる。グローバル資本のパワーがいかに強大であっても、それがこの惑星全体を覆いつくしてしまったと嘆くのは早計だし、グローバル資本主義下の知識人や芸術家が、その状況を単に推進しているだけだという見方もあまりに一面的である。最後に、Routledge に収録されているアメリカ先住民文化研究の一つを紹介しておきたい。それは「スパイダーウーマン」と名乗るアメリカ先住民のパフォーマンス芸術の分析だが、その実践は、先住民のアイデンティティとその歴史的な商品化とのあいだに引き裂かれながらも、「共犯と転覆とが分かちがたく入り混じった」ポストモダンの状況をむしろ逆手に取ることによって、「内在的な批判」に基づいた抵抗のパフォーマンスを成立させているという (Carlston: Routledge 309-312)。文化的差異のラディカルな主張とその商品化という二つの力、あるいはハイブリッド性が現在孕んでいる両義性 (Smith: Cambridge 153-4) を見据えながら、楽天的な評価にも一面的な悲観にも陥ることなく、新しい状況におけるハイブリッド性や文化的差異の概念を慎重に練り上げていくことが私たちにも求められているといえるだろう。

4. ナショナリズムと普遍主義

ダーリックの批判は、ポストコロニアル理論の「政治性」に関する従来の批判の継承といえる面ももっている。それは一口にいえば、ポスト構造主義の影響下で「テクスト性」「言説」「表象」などを重視してきたポストコロニアル理論は、本質的に非政治的だという指摘である。その議論にもさまざまなニュアンスの違いがあるが、「現場」からは一定の距離を置かざるをえない文学・文化研究において、その「政治性」とはどのようなものであるべきかという思念を充分突き詰めていない議論も少なくなく、そのような批判に本気で付き合う意味はあまりないかもしれない。

一方、今回の3冊では、ポストコロニアル研究の歴史性そのものについて再考を迫るような指摘もいくつかなされている。たとえば、ポストコロニアル理論が登場した1970年代末は、じつは脱植民地化の動きが一段落し、世界資本や新世界秩序の「第三世界」に対する攻勢が本格化した時期でもあったという指摘や (Lazarus: Cambridge 4-5)、この時代における反植民地ナショナリズムの衰退や新独立国家の状況悪化が新たな移民現象を生み出し、その状況が「ディアスポラ」の知識人たちの理論形成のあり方にも関与しているという指摘などである (Smith: Cambridge 247)。つまり、この30年ほどのポストコロニアル研究の隆盛やその理論的傾向は、じつはポストコロニアル社会の政治的・経済的な破綻という現実と、因果関係とはいわないまでも、密接な関係をもっているという論点である。これは大規模かつ複雑な問題で、ここでそれを上手に整理する準備は私にはない。しかし、この

状況が「皮肉」や「逆説」なのか、あるいはそうでないのか、じっくり反省してみる必要はあるように思われる。

上の指摘はいずれもケンブリッジの論集からのものだが、前に触れたように、独立以前の反植民地主義ナショナリズムの思想や活動に対しても、この本は強い関心を示している。規範的なポストコロニアル理論の「反ナショナリズム」に馴染んだ者にとっては、このような強調にも戸惑が感じられることだろう。その論者たちにもさまざまな態度の違いがあり、それを一つの立場として支持したり批判したりすることは難しいが、とりあえず、最近のポストコロニアル研究においては充分取り上げられてこなかったクワメ・エンクルマやアミルカル・カブラルなどの思想や活動の歴史的見直しを行うことが非常に有意義なことはたしかである。しかし、それをバーバたちのポストコロニアル理論のアンチテーゼとして無批判に称揚するのは、しよせん「イタチごっこ」の感を免れない。またこれらの思想家・活動家が生きていた時代と現在の状況との差異を十分に考慮しない限り、その「再評価」も悪しきノスタルジーに陥りかねないだろう。ただし、これらの議論の良質なものは、そのような反動やノスタルジーとは無縁の自己批判的な姿勢から、ポストコロニアル研究の本格的なパラダイム転換を図っているようにも思われる。

これらの論者がしばしば重視する過去が脱植民地化の歴史だとすれば、現在と未来の状況として強調しているのはグローバリゼーションの問題である。その意義については次の項で述べたいと思うが、もう一つ、これらの議論が明に暗に表している、「普遍性」の再認識という点について少し述べておきたい。そこにはかつての社会主義「インターナショナリズム」を髣髴とさせるような、やはりノスタルジックな側面も感じられなくはないが、あくまでも特殊性 (specificity) や個別主義 (particularism) を重視してきたポストコロニアル研究の限界や弊害も明らかになりつつあると思われる現在、新しい種類の普遍性の構築という課題も、そろそろ意識していいのではないかという気がする。30 年余り前チヌア・アチェベは、「普遍的」という言葉が「ヨーロッパの偏狭で身勝手な地方主義の同義語」として使われている限り、その言葉は追放しておきたいと述べたが (Achebe: Routledge 75)、ヨーロッパ中心的な普遍主義を乗り越え、特殊性や差異の文節＝接合の原理に立った、新しい種類の普遍性を模索すべき時期に私たちは入っているのではないかとと思われるのだ。

4. 帝国主義とグローバリゼーション

今回の3冊の多くの論者が意識していることだが、現在と将来のポストコロニアル研究の大きな課題や可能性が、グローバリゼーション問題との取り組みにあることはたしかだろう。Routledge の新テーマの一つも当然ながら「グローバリゼーション」である。そこに収められた 1990 年のアパデュライ (Arjun Appadurai) の論文“Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy”は他の2冊でもしばしば引用されているが、私自身この論文によりながら、グローバリゼーションが孕んでいる流動や分裂の現象は「アメリカの一極的な世界支配の別称というだけでなく、アメリカ自身も巻き込んで吹き荒れている、いわば『眼

のない台風』のような現象」であると述べたことがある（木村 2004: 207-209）。この見方を大きく修正する必要はいまも感じないが、しかし今回の3冊では、第二次世界大戦後のアメリカの帝国主義的な活動を指弾する論調が印象に残った。

それはケンブリッジの論集にとくに顕著だが、その編者のラザラスは、読者に以下のようなリストを突きつけている。キューバ、グアテマラ、ガイアナ、グレナダ、ジャマイカ、ベネズエラ、ボリビア、ペルー、チリ、ニカラグア、コロンビア（以上、中南米）、アンゴラ、ザイール、リビア、ガーナ、モザンビーク（以上、アフリカ）、ソマリア、アフガニスタン、イスラエル / パレスチナ、イラン、イラク、シリア、サウジアラビア（以上、「中東」）、フィリピン、インドネシア、韓国、ベトナム、カンボジア、ラオス（以上、東南アジア）——これは、第二次世界大戦後のアメリカがさまざまな「介入」を行ってきたポストコロニアル国家のリストである。ラザラスによれば、「脱植民地化」の動きはアメリカにとって最初から「反乱的で潜在的に危険な展開」であり、「注意深く監視し、脅威が増せばいつでも押しつぶすべき」ものだったのだ（Lazarus: Cambridge 38-9）。ポストコロニアル国家自体が抱えた問題も無視はできないが（ラザラス自身、それも認めている）、それにしても、これらの社会の民主的発展を故意に妨げてきたアメリカの責任はきわめて大きいと彼は訴えるのである。

それでは、たとえばイギリスは？フランスは？といった二次的、三次的な問いも生じるので、このアメリカ批判が100パーセントの説明力をもつとは思わない。しかし、植民地時代、脱植民地時代、1970年代からの国家破綻、そして現在のグローバリゼーションという歴史の流れにおいて、ほとんどのポストコロニアル社会が厳しい状況に置かれ続けてきたことは否定できず、その状況を、帝国主義からグローバリゼーションへの連続的な流れという一本の太い線で結びつけようとするその議論の力強さは大いに認めなければならない。すくなくとも、ポストコロニアル社会の過去と現在の窮状を見ようとせずに「ポストコロニアル性」の賞賛に走るような研究には、それはいい反省材料を与えてくれるように思われる。

ただし、グローバリゼーションという現象には、アパデュライもいうように、無数の流動的・分裂的な局面が含まれている。今回の3冊では、上のような関心のほかに、移民に関する問題も大きくクローズアップされている（ただし、すでに述べたように、ポストコロニアル社会の独立後の窮状と移民の増加とはけっして無関係ではないが）。ラウトリッジのアンソロジーも「ディアスポラ」の項目を新しいテーマの一つに掲げているが、ただし最近では、一時期の「ディアスポラの知識人」のブランド化というより、「第一世界のなかの第三世界」としばしば言い表されるような、非特権的な労働移民の問題へとその関心の中心が移りつつあるようである。また、いうまでもなく、グローバル資本主義の労働力はこのような移動者たちだけではない。その原理はむしろ、世界各地に散在している労働力や消費力をその圏内に編入させることにあるわけで、その意味では現地に留まりながらの「移民化」という現象の方がより大きな問題かもしれない。その点で、労働の「臨時雇用化」

や「家内労働の復活」の流れにおいて、貧困層の女性（とりわけ「第三世界」の女性）の状況に注目しようとする姿勢も印象深い（Clifford: Routledge 454; Mohanty: Routledge 485）。

グローバリゼーションの問題は、以上のように、マクロな権力主体からその末端の「受け手」の問題まで、さまざまな取り上げ方が可能だろう。あるいはその状況を、複数の「グローバル」と複数の「ローカル」の重なり合い（layers of globals and locals）と捉える見方も非常に示唆的である（King: Blackwell 510）。また今後は、それらの諸要素を丹念に選り分けたり結び付けたりする作業のなかから、最も生産的な種類のポストコロニアル研究が生み出されてくるのではないかという気がしている。

5. むすび

ポストコロニアル研究は、以上のように、いま現在も多種多様な展開をみせている。本稿ではおもに、その対象領域の拡大、批評概念の見直し、新しい普遍性の模索、グローバリゼーション現象との接合などの問題を取り上げてきたが、それぞれの問題のあいだには多くの関心の重なり合いもみられれば、矛盾や衝突の要素も含まれている。ときには「陣営」間の叩き合いという面さえ浮上することもある。これらの論争の結果、ポストコロニアル研究の領域や方法が限定された方が、ある意味では「やりやすい」面があるし、私たちの勉強量も少なくて済むだろうが、今のところ、そのような予測はとても立てられない。むしろ、ポストコロニアル性のこのような（同質的ではない）多様性、またそれを捉える視点の（予定調和的ではない）多様性は、今後もこの研究の活力を支えていくのではないかと思われる。スピヴァックは Blackwell の書評の最初と最後で、ポストコロニアル研究の最良のものは、つねに「自己批判的」（autocritical）であると述べている（Spivak: Blackwell xv, xxi）。そのことはたぶん、ポストコロニアル研究全体についてもいえることだろう。つまり、以上のような改訂、批判、亀裂なども、ポストコロニアル研究の生産的な「自己批判」のプロセスの一部と捉えるべきではないかと思われる。

この共同研究プロジェクト報告書には、本稿の他に5編の論考が収められている。そのあらましを少し乱暴に紹介するなら、まず古東佐知子の「クロード・マッケイとネグリチュード運動」は、「ポストコロニアル」の前史としてのネグリチュード運動の系譜を再検討し、そこにポストコロニアル的な抵抗の新たな可能性を見出している。加瀬佳代子の「現代の非暴力主義の言説におけるサッティヤーグラハ運動の表象」は、ガンディーの遺産としての現代の非暴力主義の言説をつぶさに検証し、非暴力主義的「抵抗」と支配権力との意外に親密な関係を浮かび上がらせている。伊勢芳夫の『『反抗者』の肖像』は、表象のメカニズムにおける「主体の位置」の問題を追究し、イギリス人によるインド表象にも「反抗者」を生み出す契機が含まれていたことを論証する。村上八重子の「母語の外に出る旅」は、この数十年のドイツにおける「外国人作家」の位置づけを丹念に辿った後、現代の移民や亡命者の文学を「エクソホニー」という新しい概念で捉えることの可能性を示唆している。小杉世の“Indigenous Language Education, Media and Literature”は、執筆者自身のマオ

り語学習体験に基づいて、現代ニュージーランドにおけるマオリ語の教育、メディアや文学へのその進出など、先住民文化の展開の現況を詳細に紹介・分析している。

これらの論考には、本稿で述べてきた新しいポストコロニアル性の所在や、新しいアプローチの仕方がすでに取り入れられているともいえるだろう。ただし、それがけっして充分なものではないこともいうまでもない。「ポストコロニアル・フォーメーションズ」というプロジェクトのタイトルには、ポストコロニアル状況の編成のされ方という、どちらかといえば受動的な意味のほかに、その編成の仕方という能動的な意味も込められている。そこには当然、私たちがどこにポストコロニアル状況を見出し、それをどのように捉えるかという問題意識が含まなければならない。この共同研究は今年度も引きつづき行われる予定である。以上のような意味での「ポストコロニアル・フォーメーションズ」への取り組みを、自己批判の精神を忘れることなく続行していきたいと思う。

参 照 文 献

- Appadurai, Arjun. "Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy" (1990) included in *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1996.
- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literatures*. Routledge, 1989.
- . *The Post-Colonial Studies Reader*. Routledge, 2006.
- Dirlik, Afif. "The Postcolonial Aura: Third World Criticism in the Age of Global Capitalism." *Critical Inquiry* 20.2.
- Hardt, Michael and Antonio Negri. *The Empire*. Harvard UP, 2000.
- Lazarus, Neil. *The Cambridge Companion to Postcolonial Literary Studies*. Cambridge UP, 2004.
- Schwarz, Henry and Sangeeta Ray. *A Companion to Postcolonial Studies*. Blackwell, 2000.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *Death of a Discipline*. Columbia UP, 2003.
- Young, Robert. *Postcolonialism: An Historical Introduction*. Blackwell, 2001.
- 木村茂雄編『ポストコロニアル文学の現在』（晃洋書房、2004年）